

東南アジア史学会会報 No.18

昭和48年3月31日

第12回大会

昭和47年11月17日(金)・18日(土)に東京の私学会館において大会を開催した。その際のプログラムは次の通りであった。

第1日 研究発表

「東南アジアの奴隷」	司会	山本達郎
碑文史料による古代カンボジアのkhnum (奴隷)		石沢良昭
ビルマの奴隷		大野徹
タイの奴隷		石井米雄
「タイ国バーン・チエン出土の彩文土器について」		伊東照司
「インドネシアの歴史学研究」	司会	中村孝志
	発表	永積昭
	討論	間苧谷栄
		土屋健治

個人研究発表

1602年のオランダ東インド会社の特許状について	田淵保雄
スダ地方のメナックについて	田中則雄

第2日 シンポジウム

共通論題「太平洋戦争と東南アジア」	司会	白鳥芳郎
インドネシア		増田与
マレーシア		板垣与一
華僑		市川健二郎
討論	内田直作	河部利夫
	後藤乾一	高橋保
	萩原宣之	高橋彰

総会

懇親会

個人研究発表要旨については、既配布の大会案内を参照下さい。なお、大会案内に未収録の伊東照司氏分のみ、以下に記載致します。

タイ国バーン・チエン出土の彩文土器について

伊藤 照 司

最近、日本の新聞に報道されたタイ国バーン・チエンの遺跡は、ラオスのヴィエンチャンの南、ウドーン・ターニーに近い小さな村落内にある。この地からの青銅器の発見はすでに知られているが、むしろこの村落内300m²の範囲から多量に出土する彩文土器に、今日非常な注目をあつめている。

この遺跡の発掘は、過去すでに三ヶ所の地にて試掘され、その内、芸術局による1967年のワット・ポーシナイ寺院内と1972年2～3月のモンローリ・ピ・ターク宅内における成果が注目される。ポーシナイ寺院の発掘は、その際、採取された土器の破片三種を芸術局がアメリカのペンシルベニア大学に Thermoluminescence による年代測定を依頼し、その結果が判明し興味深い。即ち、①地表より130cm以深からの破片：B. C. 4630±520年、②地表より深さ70～80cm間からの破片：B. C. 3590±275年、③地表より130cm位からの破片：B. C. 3570±480年と出ている。

初めて組織的な発掘が試みられたモンローリ・ピ・タークは4×4m²の試掘を三ヶ所に設け、それぞれ約2m掘り下げ、かなり詳細な層位資料を呈示している。土器に限って述べると、層位上より大きく三層つまり三期に分けて考えられる。まず①最下層の地表より深さ110cm位からS字形刻文があり、外側胴体に横帯をもつ暗灰色の浅鉢形土器が出土し、②地表より深さ50cm位より白もしくはクリーム色の素地に朱乃至だいたい色で指紋のような螺旋状の模様を主体とする意匠を彩色した美しい深鉢形の彩文土器が多く出土し、③その上位層にあたる地表より深さ30cm位よりは、②と同様で幾分大きい彩文土器が出土している。この発掘で①から③までの間に採取された四種の土器の破片は今日、芸術局が日本(奈良教育大)に依頼し、Thermoluminescence による年代設定の結果が待たれており、この発掘の詳細な成果は近日芸術局機関紙「シルパーコン」Silpākōn に発表される予定である。彩文土器に見られる螺旋状模様の展開系譜、それに中国仰韶、甘粛等の彩陶もしくはインド・インダス河流域の彩文土器との精緻な比較関係の考察も今後必要であり興味深い問題を有している。

〔海外の学界動向〕

(1)

東北タイ考古学発掘調査報告について

吉川利治

タイ国の東北部ウドンターニー県ノンハーン郡バーンチェン (Ban Chiang) 村における考古学発掘調査に関しては、すでに東南アジア史学会第12回大会で、伊東照司氏が報告され、「朝日アジアレビュー」1972年第4号で、バーンチェン村ワット・ポーシーナイ (寺) での発掘調査報告全文が紹介された。今回は、「Silpākon」誌1972年9月号にNikom Suthiragsa氏によって1972年2～3月に行なわれた同じバーンチェン村のピタックモンتری遺跡の発掘調査報告が写真、図を豊富に用いて詳しく報じられている。ここにその要約を紹介する。

1. この地区には、第(5)地層から発見された資料により、新石器時代から人類が住み、その後発展していった。
2. 第(4)地層では、新石器時代後期に至り、人類の数が増加し、次第に発達して色を用いて土器を装飾することを憶えるようになった。しかし、未だ石器を用い、土器の形は従来のものであった。
3. この地に住んでいた者は、バーンチェンから遠くないバーンオームケオ、バーンドンジェン、バーントウンフォン、バーンヤー、バーンタート、バーンノンサポンの近在地区に枝分かれして発展していき、稲作土地としての根拠地を築き、幅広く生業を営んだ。その理由は、第(3)地層に人類の発達を証拠づける出土品がある。青銅で道具、武器、装飾品を作成し、赤色で様々な文様を土器に施すことを憶えた。土器の形状は、大部分が底が丸く立てて置けない、大型の、幾種類もの文様をもったものである。文様は、三角や曲線を組み合わせて描いた線が土器の底にまで達する密なもので、注目すべきである。
4. 第(2)地層から、この人類が金属時代の後期まで代を重ねて続いていた。大部分は鉄製の道具を用い、土器は、小型で、彩色文がある。細い渦巻状の文様は第(3)地層のものほど密でなく間隔がある。大部分が花瓶様に平底になっている。緑玉の数珠が装身具として愛好された。
5. 金属器時代後期以降は、バーンチェンよりもっと豊饒な新しい生活の地を求めて、バーンチェンから移住していった。あるグループはバーンチェンからほど遠くない地区に移り住み、歴史時代まで続く。なぜなら、ロップリー時代の釉薬をかけた土器、砂岩の基礎を持つブラーン型塔に似た遺跡クーヤ、古い町の堀、城壁がウドンターニー県バーンドン郡域内で発見されているからである。

6. バーンチェンは200年前までは荒廃したままであったが、もう一派の人類がラオスのムアン・ブワンから移住して来て、第(1)地層内で、バーンチェン丘陵に生活の場を設け、家屋を築き、今日のような大規模な村落に発展した。

(2)

東京大学大学院法学政治学研究科に在学中で国際政治学専攻の鈴木佑司氏は1971年秋からオーストラリアのメルボルン近郊にあるモナシュ大学でインドネシア政治史の研究を続けているが、72年9月25日付の私信でモナシュを中心とするオーストラリアのインドネシア研究の現状をくわしく知らせてくれた。ここにその主要部分を原文のまま紹介する。

永 積 昭

オーストラリアのインドネシア研究の現状

—モナシュ大学を中心として—

鈴木 佑 司

〔前略〕Pak Roeslan とは同じ寮に住み、色々な機会にインドネシアの政治の話、文化の話あるいは外交の話、スカルノの話など楽しい思い出となりました。(例えば、スカルノは岡倉天心の著作を愛読し、色々な角度から彼の「東洋の理想」を政治思想の土台としたことなどは、活字にならない重要な指摘でした。)

脱線しますが、Pak Roeslan は訪日の希望がかなりあり、私にもその旨強く伝えられました。私も一応心当りを捜して見ましたが……アジ研と京大東南アジア研究センター……可能性は殆んどないとのことでした。将来のことと思います。

ところで最近 Monash の Centre of Southeast Asian Studies ではじめての Monograph を出版しました。Rex Mortimer, *The Indonesian Communist Party & Land Reforms, 1959-1965*, 1972 別便でコピー 一部をお送り致します。Rex Mortimer は Monash の Indonesian Politics からの Ph.D. 第一号で、研究は *The Ideology of Indonesian Communist Party (PKI) under Guided Democracy*, 1970, 2 vols という大部なもので、その一部とくに BT 1 (Barisan Tani Indonesia) の Land Reform Movement (Aksi sepihak) の章が上記のもので、彼はもう *Indonesia* に載せた論文, "Class, Social Cleavage and Indonesian Communism" no. 8, Oct. 1969 で明らかにしたように、Wertheim とは

6. バーンチェンは200年前までは荒廃したままであったが、もう一派の人類がラオスのムアン・ブワンから移住して来て、第(1)地層内で、バーンチェン丘陵に生活の場を設け、家屋を築き、今日のような大規模な村落に発展した。

(2)

東京大学大学院法学政治学研究科に在学中で国際政治学専攻の鈴木佑司氏は1971年秋からオーストラリアのメルボルン近郊にあるモナシュ大学でインドネシア政治史の研究を続けているが、72年9月25日付の私信でモナシュを中心とするオーストラリアのインドネシア研究の現状をくわしく知らせてくれた。ここにその主要部分を原文のまま紹介する。

永 積 昭

オーストラリアのインドネシア研究の現状

—モナシュ大学を中心として—

鈴木 佑 司

〔前略〕Pak Roeslan とは同じ寮に住み、色々な機会にインドネシアの政治の話、文化の話あるいは外交の話、スカルノの話など楽しい思い出となりました。(例えば、スカルノは岡倉天心の著作を愛読し、色々な角度から彼の「東洋の理想」を政治思想の土台としたことなどは、活字にならない重要な指摘でした。)

脱線しますが、Pak Roeslan は訪日の希望がかなりあり、私にもその旨強く伝えられました。私も一応心当りを捜して見ましたが……アジ研と京大東南アジア研究センター……可能性は殆んどないとのことでした。将来のことと思います。

ところで最近 Monash の Centre of Southeast Asian Studies ではじめての Monograph を出版しました。Rex Mortimer, *The Indonesian Communist Party & Land Reforms, 1959-1965*, 1972 別便でコピー 一部をお送り致します。Rex Mortimer は Monash の Indonesian Politics からの Ph.D. 第一号で、研究は *The Ideology of Indonesian Communist Party (PKI) under Guided Democracy*, 1970, 2 vols という大部なもので、その一部とくに BT 1 (Barisan Tani Indonesia) の Land Reform Movement (Aksi sepihak) の章が上記のもので、彼はもう *Indonesia* に載せた論文, "Class, Social Cleavage and Indonesian Communism" no. 8, Oct. 1969 で明らかにしたように、Wertheim とは

6. バーンチェンは200年前までは荒廃したままであったが、もう一派の人類がラオスのムアン・ブワンから移住して来て、第(1)地層内で、バーンチェン丘陵に生活の場を設け、家屋を築き、今日のような大規模な村落に発展した。

(2)

東京大学大学院法学政治学研究科に在学中で国際政治学専攻の鈴木佑司氏は1971年秋からオーストラリアのメルボルン近郊にあるモナシュ大学でインドネシア政治史の研究を続けているが、72年9月25日付の私信でモナシュを中心とするオーストラリアのインドネシア研究の現状をくわしく知らせてくれた。ここにその主要部分を原文のまま紹介する。

永 積 昭

オーストラリアのインドネシア研究の現状

—モナシュ大学を中心として—

鈴木 佑 司

〔前略〕Pak Roeslan とは同じ寮に住み、色々な機会にインドネシアの政治の話、文化の話あるいは外交の話、スカルノの話など楽しい思い出となりました。(例えば、スカルノは岡倉天心の著作を愛読し、色々な角度から彼の「東洋の理想」を政治思想の土台としたことなどは、活字にならない重要な指摘でした。)

脱線しますが、Pak Roeslan は訪日の希望がかなりあり、私にもその旨強く伝えられました。私も一応心当りを捜して見ましたが……アジ研と京大東南アジア研究センター……可能性は殆んどないとのことでした。将来のことと思います。

ところで最近 Monash の Centre of Southeast Asian Studies ではじめての Monograph を出版しました。Rex Mortimer, *The Indonesian Communist Party & Land Reforms, 1959-1965*, 1972 別便でコピー 一部をお送り致します。Rex Mortimer は Monash の Indonesian Politics からの Ph.D. 第一号で、研究は *The Ideology of Indonesian Communist Party (PKI) under Guided Democracy*, 1970, 2 vols という大部なもので、その一部とくに BT 1 (Barisan Tani Indonesia) の Land Reform Movement (Aksi sepihak) の章が上記のもので、彼はもう *Indonesia* に載せた論文, "Class, Social Cleavage and Indonesian Communism" no. 8, Oct. 1969 で明らかにしたように、Wertheim とは

異った分析をしており、“Gestapu”を前後にした大変動の研究としては新しい地平を開いていると思われまゝ。彼の最近の Book Review - B. Anderson, *Java in a time of Revolution*, Cornell Uni. Press, 1972 は、今後のインドネシア研究にとって、Geertz 的な視角からより Anderson 的な視角へと展開してゆくことが基本的に大事なことだとしながらも（政治を文化のタームで捉え返すことを評価する）、文化論が政治を決定的に規定するという「文化決定論」は、社会、経済構造の規定性—意識の存在被拘束性—を見失いがちになること、第二に文化のタームでの政治の分析（“cultural analysis”）はどうしても「連続性」に力点が置かれ、それ故に一定のイデオロギー的には“保守”の傾向をもつことを忠告しています。（私が見たのは *Australian Outlook* の draft で近く出版されると思います。Ben 自身もそのことにはかなり注意していると思います。）

少々くどくなりましたが、Rex はある意味でモナシュの今後を望見させると思いましたので、長く書きました。若手の研究者には Rex とは少し Communism の理解という点で違うけども、かなりの点で一致するという人が多いように思います。

ただ、現在 Anderson の前掲書（Ph. D. Thesis, *Pemuda Revolution* と *Some Aspects* (monograph) の改定出版と思われる）と、Claire Holt ed., with B. Anderson, *Culture and Politics in Indonesia*, Cornell Uni. Press, 1972, とりわけ Ben の “The Idea of Power in Javanese Culture” pp. 1 - 71（かつてアメリカの政治学会に提出されたもの）を読んでいます。未だ私にはよくのみこめないところがあって、決定的なことは申せませんが、“Culture” のもっている構造を明らかにしながら政治現象を説明するアプローチは今後かなり有力となるように思います。

しかし、まさに Rex が評価しつつも疑問を禁じえなかった「文化決定論」への批判が、彼自身によっても、又若い学者（大抵は postgraduate）によっても地域政治（又は、否、むしろ正しくは地方政治）の研究として行われつつあります。確かに 9.30 以降 中央政治への興味がなくなりつつあることは見易いことのようにです。勿論それは、ナショナルなレベルでの問題が解決されたとかあるいは軍事政権によってもみ消されているとかいったことでは決してありません。寧ろ逆でありましょう。まして “modanisasi” を強力に推進していることから言えば、体制の内外により複雑で構造的な問題が、従来とは異った形で現われてきていると言っても良いのではないのでしょうか。より深く社会構造に根ざした問題であるが故にこそ、社会の原点それはおそらく共同態（Gemeinde）としての村落レベルまで下りくだって社会自体の構造とその変動を構成しなおすこと以外

に問題に肉迫しえないのではないかと思います。(この点で後藤乾一学兄の論文(アジア経済1972, 6)は非常に示唆的ではないかと思います。)この研究方向は現在のモナシュでは、階級分析の再評価をめぐって激論がなされ、従来の非インドネシア人学者の問題意識やそれが立脚している価値観の再検討(つきはなしてみることに)まで発展しそうです。近く様々なペーパーが出されると思いますので、選択的に送りしようと思っています。Andersonは、もう御存知と思いますが、*American Values and Research on Indonesia* というペーパーを出しています。(年月と詳細はよく判りません。私はコピーを持っていますが。)おそらくこうした検討はインドネシア研究に限らず、フィリピンからビルマまでの東南アジア諸国における「近代化」政策と「経済開発政策」の矛盾、あるいは不均等発展による社会の分化の進行からくる、より構造的な問題といった現在の研究のみならず、歴史の現代的研究意義にも及ぶ大事なことだと思います。よく参考にされるのが、Barrington Moore Jr., *Social Origins of Dictatorship and Democracy*, 1966, The Penguin Press. です。

その他、やはりPenguinからProf. John Leggeが*Sukarno*を出版します。私はまだ全部は読んでいませんが、瞥見したところ、スカルノの政治思想と行動に関してよくまとまった研究(どちらかというともスカルノ研究の研究)と思いました(500ページにのぼる大部)。他にPh. D. Thesis 第二号のUlf Sundhaussen(現在Papua New Guinea Uni.の講師)の*The Political Orientations and Political Involvement of the Indonesian Officer Corps: 1945 - 1966: The Siliwangi Division and the Army H. Q.*, 1972. が面白い作品だと思います。

その他一般概説書まで含めたインドネシア関係の書物や研究は、オーストラリアでは最近(この一年だけでも)随分沢山になります。ただ一般的に言えることは、最近代のものが殆んどで、ただ二人だけ(Monashでは)1930年代までの政治史を扱っているPh. D. candidatesがいるだけです。

庶務報告

1. 大会の開催と会報の発行について……大会開催は年1回とし、会報の発行回数を増やし、かつ内容を充実させることが、委員会で決定されました。なお、外国人学者の来日のおりには、適宜、臨時の会合をひらくことも考慮されております。

2. 会員数について……今大会で15名、その後3名があらたに加入され、会員総数は158名になりました。皆様の御努力で会員数が増加しつつありますが、今後とも御協力くださいますようお願いいたします。なお、会報のバックナンバーの用意も若干ございますので、御入用の方はお申し越してください。
3. 会費の値上げについて……学会発足以来会費1,000円を続けてまいりましたが、そろそろやりくりが苦しくなってきました。そこで、来年度（昭和48.11月以降）から一般会費を1,500円にすることが、委員会から提案され、今大会で承認されました。ただし、学生会員の会費は1,000円にすえおくことになっております。

◎ 会費納入についてのお願い

秋期大会の欠席者で会費未納の方は同封の振替用紙にて払込み下さいますようお願い致します。今年度（47年）は47年11月1日～48年10月31日となっております。

昭和46年度 収支決算報告（昭46.11.1～昭47.10.31）

I 収入の部	会員会費収入	141,585円	II 支出の部	大会運営費	135,155円
	懇親会費収入	31,500		会報刊行費	32,000
	寄付金	75,550		通信費	20,585
	引継時繰越金	17,942		事務連絡費	3,830
	合計	266,577円		その他諸経費	4,475
III 差引残高（次年度繰越金）		30,537円		合計	236,045円

尚、会計の担当委員、中嶋幹起氏は海外出張のため委員をおり、間苧谷 栄氏（庶務委員）が会計を兼務することになりましたのでお知らせ致します。

以上

「東南アジア—歴史と文化」原稿募集

会誌収載論文を下記要領で募集いたします。

○原稿枚数（200字詰）

論文、研究ノート：100枚以内、書評・紹介：50枚以内、学界消息：10枚以内
必ず1,000語以内の英文による概要を附して下さい。ご寄稿の際は既刊会誌の「執筆要領」をご参照下さい。

○締切日 第3号 5月末日 期日までに事務局に必着のようご送付下さい。

急 告

このほどアジア歴史学者国際学会 (The International Association of Historians of Asia, 略称 I.A.H.A.) より下記の通知が参りましたのでお知らせいたします。 (永積 昭)

アジア歴史学者国際学会の第6回会議はインドネシアのジョクジャカルタで、1974年8月下旬に開催の予定です。会議ではアジア史の多くの側面についての1週間の(英語での)討論が、いくつかの部会にわかれて行われるはずで

す。これ以上の詳細については、1973年6月に発行される予定の我々の第2回通知でお知らせ致します。

この御通知を受け取らなかった方で、興味をお持ちの方のお名前と御住所を知りたいと思います。通信連絡は下記にお願いします。

Secretariat of the 6th Congress of I.A.H.A.
c/o Lembaga Research Kebudayaan Nasional LIPI,
P.O. Box 165, Jalan Pejambon 3
Jakarta, Indonesia

アジア歴史学者国際学会

総 裁 Prof. Dr. Sartono Kartodirdjo

事務局長 A. B. Lopian

昭和48年3月31日発行

発行者 東南アジア史学会

住 所 〒114 東京都北区西が原4-51-21

東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

電 話 (03) 917-6111

振 替 東京 59721